

追悼



国際的な核医学者 永井輝夫先生を偲んで

中野 隆史

Nakano Takashi

群馬大学名誉教授で日本アイソトープ協会元常務理事を務められた永井輝夫先生が令和2年9月25日にご逝去されました。享年95歳でした。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

永井先生は昭和25年東京大学沖中内科に入局されましたが、中尾喜久先生のご指導の下、 ^{59}Fe , ^{55}Fe , ^{32}P , ^{35}S 等を用いて鉄代謝、赤血球の研究を行い、順天堂大学放射線医学教室に赴任し、我が国最初の核医学に関する著書『Radioisotopeと臨床』を出版されました。先生は入局の挨拶でアイソトープ研究を目的に入局されたと抱負を述べ、その発言が恰好良すぎて周囲の度肝を抜いたそうです。昭和30年初頭は放医研病院の設立のために塚本憲甫所長に協力する等、東大時代から、医療にRIを利用し、核医学・放射線医学の発展に寄与されました。

そして、昭和34年放医研・臨床研究部研究室長となりました。その年米国オークリッジ (ORNL) にフルブライト留学され、核医学全般を学ばれると同時に ^3H サイミジンミクロラジオグラフィ法を日本に導入されました。帰国後、放医研で、副腎用放射線医薬品開発やCs, Ru等各種のRIの人体内代謝解析等の業績を挙げると共に、核医学領域でのIAEAを通じた国際貢献や国内の人材養成に尽力されました。そして、こうした活動が評価され、昭和43年から5年間はIAEAに派遣され、国際公務員として、国際的立場で核医学を推進されました。特にコンピュータ支援シンチグラフィの比較研究の国際協力研究を推進し、放医研の飯沼武先生を班員として大きな成果

を挙げられました。先生はIAEAでの最も大きな収獲は世界中の著名な核医学研究者と知己になり交流を深めることができたことだと語られておりました。

IAEA 帰国後昭和49年に群馬大学医学部放射線科教授に就任し、放射線医学教室を主宰されました。筆者は昭和54年に永井教室に入局し、放射線医学全般にわたりご指導をいただきましたが、先生が前橋で開催された第20回日本核医学会総会では世界第1号のシンチスキャナをスミソニアン博物館から借出し展示され、先生の国際的なお力に驚かされました。昭和61年から医学部長を務められた4年間は学会出張を一切控え本務に集中され、当時、国立大学に4つしかない核医学講座と核医学・画像医学診療科を設置し、佐々木康人先生を教授に招き、国立大学では2番目のサイクロトロン診断部門棟を設置されRI研究棟の実現に貢献されました。先生は、“例え定年前でも自己評価を行い後進に道を譲る勇氣を持つべきである”との信念をお持ちで、定年まで2年を残して平成2年群馬大学を退官されました。この間、日本核医学会理事/理事長をはじめ日本画像医学会会長、厚生省医療関係者審議会委員、各種学会の評議員等を務められ放射線医学界の発展に多大な貢献をされました。

日本アイソトープ協会では昭和39年から幹事や理事を歴任され、大学を退官された後は協会のお仕事に専念され、平成8年から平成14年までは常務理事として協会の発展にご尽力されました。永井教授はご自分のたどられた学者人生を、“名実共にRIのプロムナードそのものであった”と述懐しておられました。

最後に、群馬大学に重粒子線治療施設を導入するプロジェクトが平成13年から開始されましたが、永井先生には、当時、向こう見ずな情熱と狭小な視野の筆者に対し、“国際的な視野から日本国のための視点で必要性を訴えなければ、そのような巨額なものは導入不可能である”旨のご指導をいただきました。更に、躊躇する大学執行部にも強力に助言をいただき大学レベルの導入活動が開始され夢が実現できました。永井先生の先見性と国際的研究者の大きさを改めて認識させていただくと共に、先生に心から感謝とお礼を捧げて追悼の言葉に代えさせていただきます。

合掌

((国研)量子科学技術研究開発機構 量子医学・医療部門長/群馬大学特別教授)